

祖国のため

酷寒・苛酷のシベリアへ

新潟県 高橋 吉郎

信州と越後の国境で千曲川が越後へ入ると、風光明媚の苗場山や秋山郷を起点として流れて来る主要河川と合流して日本一の信濃川となるが、この信濃川を北方へ流れて約二十キロほどの東岸に我が古里、十日町市城之古という純農村集落がある。その集落に自分は大正七（一九一八）年一月二十四日に生を受けたのであった。百姓の三男坊に生まれ、豊かな自然の中に育ったので、八十五歳に来年一月二十四日であるのであるが、おかげさまで病気で入院するというようなことはなく、健康で今日に至っていることは神仏の加護であると感じているところである。

昭和十八（一九四三）年十月五日、会津若松東

部二十四部隊に新潟警察署から召集され入隊したのがついこの間のように思われるのである。自分の場合の軍隊とシベリア抑留は全く苦闘と屈辱の人生であり、軍隊の一年九カ月、シベリア抑留の四年二カ月、合計六年ほどは正に地獄の人生であった。これは自分のためではなく国家のためであった。この長い年月は忘れることはできない大きな犠牲であったのである。しかるに巷間、シベリア抑留はシベリアの捕虜になったと言われていることは実に残念至極である。が故にその実態をこれまで九回にわたり、シベリア抑留体験記を投稿したところであり、今回で十回で、年一回十年の長きにわたり記述したところである。筆舌に尽くし得ぬ苦闘屈辱の記録は語り尽くせるものではない。この記述を決して無にせず、再びこのような悲惨な事がないよう後世のために記述としたものである。

自分が召集を受けた当時は、我が国が既に世界を敵とする羽目におちいり、米国の飛行機が飛来

してこの新潟市にも空襲警報がかかり、署長は常在戦場の訓辞をして緊張した空気となり、夜間も非常招集がかかり、非番には防空演習の指導に出るなどして非常態勢で戦場のようであった。連日連夜の勤務で県都新潟市の治安の任に万全を期していたやさきの召集令状であったのである。県都新潟市の治安を守る新潟警察署の定員は百七十人であったが、召集により軍隊に入隊するなどして実員は百三十人であった。昼夜の別なく全力を尽くしていたので市民の警察に対する理解も深く、また協力体制も強化され、署員もこれにこたえるため民警一体となって努力していたのであった。自分は署の裏手にある独身寮に寄宿しており、町内は礎町内会で、会長は黒川町内会長さんであった。自分が召集になったので、黒川町内会長さんが先頭に立って町内のプラスバンドで万代橋から新潟駅まで盛大に日露戦争当時の軍歌、「雪の進軍氷を踏んで」で町内会の皆様をはじめ全署員一同長い行列で見送りしていただいたのが、つ

いこの間のような気がするのである。

新潟駅から郷里に帰り、郷里でも、大戦争になりおそらく再び帰ることはないだろうと、口には出さなかったが皆そう思っていたことであろう、悲壮な面持ちで迎えてくれた。現に我が集落でも戦死者が出ており、おそらく最後の別れとなるであろうと悲壮な顔で氏神様に武運を祈り、万歳万歳と祝出征ののぼりの林立する前で必死になって祈ってくれたのであった。自分もまたこれにこたえるように、必ず勝って来ると誓いの言葉を申し述べて、元気いっぱい独身の気軽さのために喜んで郷里を後にして、村の小学校で挨拶を代表でして、十日町駅に向かったのである。駅では日の丸の小旗を打ち振る中を列車に乗り、列車の窓から手を振って別れを惜しんだのであった。

会津若松の旅館で一泊して翌日の昭和十八年十月五日、無事会津若松東部二十四部隊に入隊することができたのである。会津若松で二週間ほど出征準備をして、九州から輸送船で日本海に出て祖

国の山々が遠くかすんで見えだしたころ、これで祖国とも最後の別れとなると思うと涙が頬を伝うのであった。これは自分一人でないと思うのである。

朝鮮から満州に入り、昭和十八年十月二十日、旧満州東安省、満州東安第一三八七部隊に午後十時ごろ入隊したのである。この部隊は貨物廠の警備その他の任務であった。一個中隊ほどの部隊であった。兵舎は防空などの面から平屋でやや細長く、両側は土盛りがしてあって防寒の面からもなつてモグラの兵舎のような感じがするのであった。初年兵は、二百人ほどであった。二個小隊の四個分隊で、一小隊長は柿沼少尉であり、二小隊長は赤塚少尉であった。一分隊長は熊坂軍曹で、二分隊長は紺野軍曹、三分隊長は白岩軍曹で、四分隊長は菊地伍長であった。各分隊が班になっており、四個班で各分隊長が班長になっていたのである。自分は一分隊で熊坂班であった。班付に、鈴木兵長、坂井上等兵、渡辺上等兵、古田上等

兵。初年兵教育の教官は少尉で下士官や補助で各上等兵や助手であった兵長もそうであった。将校は営外居住で官舎におり、下士官は兵舎の一室で起居していたのであった。

自分の班には古年兵の近藤という一等兵が班付となっていた。班の内部は中央に幅一・二メートルほどの板敷の廊下をはさんで三〇センチほどの高さで両側二メートルほどの板の上にコウリヤンがらで編んだアンペラのような敷物を敷き詰めて、その上にゴツゴツした厚地の布製のズックの細長い袋の中に乾草が入つてマットレスのように敷いてあり、その枕元に毛布が六枚きちんと積み重ねてあった。これが我々初年兵の起居する場所であった。各人の占める面積は畳一枚ほどの面積であった。食事をするのも就寝するのも一緒であった。起床ラッパで起床し、急いで営庭に整理し点呼が終わると兵舎に入り朝食となり、晴天の日は訓練から場外に行き、連日猛演習となるのであった。雨天のときは営内で教官の訓話や学科な

どが行われるのであるが、満州の冬は晴天ともつかず、曇天ともつかない日が続き、雨天の日は週に二日と続かなかつた。毎日の訓練や演習でへとへとに疲れる毎日であつたのである。

入隊して最も大切な軍人勅諭が教示された。

一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし

一、軍人は礼儀を正しくすべし

一、軍人は武勇を尚ぶべし

一、軍人は信義を重んずべし

一、軍人は質素を旨とすべし

と明治大帝当時の軍人勅諭を軍人精神五カ条として教示していた。しかしこの勅諭を守っていたならば我が国は戦争に敗れることもなく、また太平洋戦争のような無謀な戦争はしなかつたであろうと、しみじみと軍隊に対する現実に対して余りにも誤つた方向に踏み込んでしまつたことを、初年兵教育の冒頭から痛感せざるを得なかつた。普通初年兵教育は三カ月であつたが、我々の場合は昭和十八年十月二十日から翌年二月末日の四カ月余

りで、日曜日も兵舎内で洗濯や衣服の繕いなどで、外出は禁ぜられ、兵舎内にとじこもつていなければならなかつたのである。

初年兵教育に入つて間もなく内地から慰問袋が送られて来て各人に渡された。自分のところに渡つた慰問袋にはマカロニーが入つていた。そこで班付上等兵のところへ伺いをたてたのである。「上等兵殿、慰問袋の中にマカロニーが入つておりました。どのようにしたらよくありますか」と申し出たところ、「そうか、せつかく内地から送られて来たものだ、飯ごうに入れて煮て食べる」という指示であつたので、飯ごうに入れてペーチカの上で上げておいたがなかなか煮えない。間もなく就寝点呼になるのでペーチカのたき口に置いたところ、週番下士官が点呼と号令をかけて班に将校とともに入つて来た。班長は異常なしと報告して週番士官の赤塚少尉が通り過ぎようとして、自分の飯ごうを見つけ「やや、これは何じゃ、天皇陛下の一類兵器を」と言つて班長の軍曹に向

かつて「あとでわしの所に来い」と言い残し次の班に去って行った。就寝点呼も終わり、消灯ラッパが鳴って、就寝しようとしていたところ、班長が帰って来て、顔青ざめて、目をいらだたせ、班員全員正座を命じたのである。約二時間正座せしめ、ようやく解除となり、就寝することができたのである。

それからというものは、すっかり班の注目の的となってしまう。次の日曜日から、上等兵が、態度が悪いと言って、前ささえをせしめ、自分は立ち去って、古年兵に監視せしめ、ほとほと参ってしまった。とんだ慰問袋をいただいでしまった。

ある日、演習中、突撃の号令がかかり、銃に剣を着剣してほふく前進した際、帯剣のさやに粉雪が詰まり、帰營してこれを手入れするため、銃についているサクジョウという細い鉄棒の先に布切れをつけて剣ざやに差し込んだところ、布切れが外れて剣ざやの中に残ってしまった。既に就寝点

呼となるので無理に剣をさやに押し込んで枕元に掛けて点呼を受け、点呼が終わると自分の前に廊下を隔てて起居していた兵長が自分に向かって剣をよこせと言うのでこれを渡すと、彼は抜こうとしたがなかなか抜けないのでそのまま自分の頭部を三回ほど殴打したのである。このときばかりは、目から火が出ると言うが目の前がチカ、チカとしてひどい頭痛がしたのであった。頭部に三本のコブが筋になってきたのであった。この様子を五メートルほど離れている班付上等兵が見て、自分に向かって剣を持ってこいと言うのでこれを持って行くと、彼はドライバーでネジをまわし、トンと突くと剣ざやの奥から布切れが落ちて来たのである。そして彼は、よし持つて帰れと言った。自分はあるがたくありがとうございましたと言つて帰ろうとすると、彼は待てと言つて申し訳のようにピントンを二回ほどとつて、よしと言つたので、自分の席に戻つたのであった。

毛布をかぶつて就寝したがなかなか眠れなかつ

た。前ささえも苦痛であったが剣ざやのついたままの殴打はひどい仕打ちであった。我が国の刑法で禁じられている、かかる暴力行為が軍隊では公然と許されていたのである。このため傷害を受けたとしても許されるのであろうか、いかに初年兵教育といえども、これでは反感を抱かざるを得ない。いささかの思いやりもない暴力集団と言っても過言ではないのである。初年兵に対する温かい思いやりの心で接すべきであると思うのであった。これでは信頼は生まれて来ないと痛感されたのであった。聞くところによると帯皮ビンタン、営内靴ビンタンなどの言葉も聞かされたのである。ソ連軍にはビンタンはないと言われている。日本軍は強いと外国に言われているが、真の強固ではない。このようなところに我が国は世界に孤立してしまった原因が潜んでいたのである。

兵隊地獄のような四カ月が終わり一期の検閲も済み、一つ星が二つ星の一等兵となって、西東安の貨物廠に警備歩哨の一員となって同年兵六人、

上等兵二人、軍曹一人の合計九人で分遣隊となって昭和十九年三月一日付で任務に就くことになったのである。初年兵教育中、飯ごうは天皇陛下の人類兵器であると強調されたが、自分にとってには、シベリア抑留中ソ連兵の歩哨の目をのがれてシベリアの野草を岩塩を入れて味付けをして飯ごうで湯がいて空腹の余リムシヤムシヤとがむしやらに食い、命を落とすことなく病弱者にもならず生き抜くことができたことは全く命の恩人とも言うべきであったのである。

しかし残念なことには、舞鶴に上陸寸前、赤組と日の丸組とが要求貫徹と称して船中でもみ合い、自分は中立で甲板に出て祖国の山々を眺めて船倉に下りて見ると、思い出の飯ごうと水筒がさっさと上陸した日の丸組と思われる者に持ち去られてしまったことであった。また、日の丸組と思われる者が先に上陸して、自分を密告したと思われるのであった。それは引揚者名簿の氏名の頭に赤丸がついていたことである。自分は共産主義

には批判的であつた。軍隊に階級がなくなり、自分は作業責任者をソ連から命ぜられて長くやってきた関係から、赤旗組と対立する日の丸組の仕業と考えられるのであつた。日の丸組は若い将校が主導者であつたが、この赤丸によつて、帰還列車の中で私服の警察官が隣席しており、自分を監視していたことがわかつたのである。また警察官に復職しても思想的注意人物として見られていたのであつた。

世の中は苦あれば楽ありで、地獄のような初年兵教育も終わり同年兵六人とともに西西安の貨物廠に警備歩哨として分遣隊に出たのであるが、二十四時間勤務で激務ではあつたが幹部の軍曹や上等兵はいずれも一人前の兵隊として見てくれて、精神的にはゆとりのある毎日を送ることができた。

満州の三月は早春とはいへ、深夜ともなれば零下二〇度にもなる厳寒の酷寒となるので、一時間の深夜の立哨は耐えられなかつたのである。しか

しわずか九人の分遣隊で貨物廠を管理運営している経理部将校の大尉と曹長、兵の三人で、満人労務者五十人ほどと我々の食事を作る労務者三人の外、糧秣を運ぶマーチヨを運転する労務者が三人ほどで、働いていた満人は素朴で純真であつた。また、まじめに陰ひなたなく働いている姿を見て感心させられたものであつた。これは我が国の開拓団の人々や一般邦人の人々が満人と良好な人間関係を保つていたことに外ならないと思うものである。終戦後ソ連の不法侵攻によつて避難する際、満人が我が子のごとく戦災孤児を親身になつて育ててくれたことが何よりの証明である。我が国は中国の人々に対しては深く感謝しなければならぬのである。中国の人々は我が国の恩人であつたのである。満州は荒漠千里の不毛の地であつた。戦争さえなければ全く王道楽土の地として栄えたことであつたらうと残念でならないのである。

西西安の貨物廠の警備歩哨の任務も四カ月ほど

で交代となった。今度は東安の本隊に帰り、東安で最も大きな代表的な貨物廠とも言うべき東安貨物廠の経理部の将校ばかり詰めている詰所の門衛歩哨と言わなければならない。自分一人と他部隊から古年兵の一等兵と、二人で勤務することになった。

日勤で八時間勤務で楽な勤務であった。しかし、ここでも自分の弟のような若い将校に敬礼が悪いと注意された。平常軍隊に対して不満を抱いていることがどうしても表面に出るのであろうか、また一年志願の成り上がり将校めと内心思うのであった。

この勤務もわずか一カ月ほどで我が部隊はさらにソ満国境に近い、虎林の貨物廠の守備その他の任務に移動することになり、昭和十九年八月、盛夏で、虎林という所は盆地になっており、無風地帯で蒸し暑く、内地のそれ以上の暑苦しい地であった。耐熱演習が連日猛烈に行われた。突撃演習になると汗びっしょりとなり、のどがからからに渴き、水筒の水以外は絶対に飲むことを禁じら

れていた。しかし、ある日、苦しまぎれについたまり水をぐくりぐくりと飲んでしまった。案の定翌日腸をやられてしまったのである。激しい下痢がして苦しんだのであった。

耐熱演習も一カ月ほどで終わり、ようやく涼風が吹き秋の気配がしてくるころ、警官から召集されたので同年兵の同じ警官から召集された大橋平九郎君と二人で満人労務者の物品持ち出しなどの監視の任務につき、昭和十九年九月から翌二十年四月ごろまで勤務をなした。同じ新潟県巡査であったので入隊前の勤務のような毎日で、精神的に楽であった。

十カ月ほどの監視の勤務も急に隊が異動することになり、出発点、東安の原隊に帰隊したのであった。しかしこの異動が何かよからぬ予感だったのであった。そのころ、ソ連が不可侵条約を一方的に破棄したようであったが我々兵には知らさなかつたのである。東安に帰隊しても別に演習することもなく、毎日待機のようにあり、時々夜間

に非常呼集がかかるなど不穏な空気が流れていた。三カ月ほど過ぎた昭和二十年八月八日、部隊は異動することになったのである。どこへ行くのか我々には知らさなかつた。真夏の太陽がざらざらと照りつける中、汗だくでくで部隊の装備品を貨車に積み込んでその夜出発した。真夜中にソ連外相モロトフが宣戦を我が国に布告してきた。いよいよ戦争が開始されるのであると緊張したのである。我々が翌朝牡丹江に到着すると、戦闘帽に白鉢巻きをして鉄道線路を補修するトロツコに将校は立つて兵は座して、次々と我々が来た道を逆の方向に前進して行く決死隊とすれ違うのであった。我々はこれと反対に後方へ下って行き、八月九日の夕方、四平街の指導学校に駐屯したのであった。指導学校に駐屯した我々は八月十日四平駅へ装備品を受領に行くとき避難民が鈴なりとなつて列車が黒煙をあげ、ポーポーと悲鳴を上げるがごとく渋滞して混雑を極めていたのであった。

その後間もなくソ連軍が侵攻して来て、婦女子

が兵隊さん助けてと我々のところに助けを求めて来たりして、ホームレスのように見すばらしい服装をしたソ連兵が自動小銃を携えて来たが我々の姿を見て逃げて行ったり、戦闘機が機銃掃射をドカドカーと撃ってきたりして、いよいよ戦闘が開始される空気となつたやさきの昭和二十年八月十五日の正午ごろ、天皇陛下の玉音がしてきたのであった。その後八月二十日ごろ四平の指導学校から児玉公園に行き武装解除を受け、その日の夕方陽木林の我が軍の兵舎に移り、同九月二十七日、満鉄の貨車に乗車して北上して行ったのである。ウラジオストックから東京ダモイと言っていたが、半信半疑であつた。案の定シベリア鉄道を逆方向に進み、シベリア第一の都市イルクーツクの郊外でイルミジヨという所の第六収容所に昭和二十年十一月十一日収容され、長い抑留生活が始まつたのである。

抑留されて一週間は何にも食料は支給されず、八日目に凍結した黒パンが渡されたが、のどに通

らなかった。収容所の周囲は二重に有刺鉄線が張り巡らされて、四隅に望楼が立てられてソ連兵が銃を持って監視しており、まるで我々は重罪犯人のごとくであった。収容されて間もなく屋外の穴掘り作業に出されたが、既に地面は鉄のように凍結しており、長さ一メートル二十センチ、直径二十センチほどの鉄棒を渡され、これを地面に打ちおろすのであるが、ピンピンとはね返り、とても掘れるものではなかった。零下三〇度の屋外は灰色の空から霧のようなものが吹いて来るといっても立つてもいられない。防寒帽の毛は白く吐く息で凍りつき、頬は針を刺されるような痛さである。わずか一時間がとても長く感じるのである。少しでも手を休めると囚人上がりのマッセル（監督）が飛んで来てダワイダワイ（やれやれ）とわめき立てるのである。まさに地獄そのものであった。

収容所へ帰っても二百グラムの凍結黒パンと水のようなスープである。晝一枚に二人という頭の

つかえる所が唯一の起居の場所である。防寒外套を着の身着のまま眠るのであるが、疲れており、死んだようになって眠るのである。着の身着のまま寝るので日を追うごとにシラミがたかり、これが蔓延するのである。腹巻にゴマをふつたようにびつしりとつき、これがはい回るのである。一カ月もたつてやつと街のバーニヤ（浴場）に行くがバケツに二杯しか渡されなかった。このような強制重労働に名ばかりの食料、悪環境で体力の弱い者はこれに耐えられず衰弱していったのである。そして病弱者となつていくのであった。これらの悪条件が重なり抑留された昭和二十年からの冬に多くの犠牲者が出たのであった。

我々がシベリアに抑留された当時は、ソ連でも極端に食糧が逼迫しているところから、我々に支給すべき糧秣をソ連が横取りするなどして悲惨な目に遭わされたのであった。我々の収容所でも、収容所長のグリゴリー大尉が食料を横流しをして、一週間に大豆ばかり飯ごうの中ぶたに八分目

ほどを主食として支給してきたり、アワ粒がキャベツにからまったものを、カーシャー（かゆ）として一週間も支給してきたりして、余りにもひどい仕打ちに代表として大津鉄治氏が抗議をしたところ、他の収容所に移されるなどした。結局我々は泣き寝入りするより外なかつたのであつた。収容された年の最もひどい年の冬を越し、二年目の冬あたりからバーニヤ（浴場）ができたり、我々の中から理髪師の経験者によつて散髪所ができて、逐次環境も整備されたが食料だけは満足という訳にはいかなかつたのである。

自分は軍隊では常に不満を抱いていたが、抑留されてからは誰よりも先頭に立つて何事にも積極的に先立つて出るようにしたので、自分でも率先して出ることが何か分らないものが後押しするように勇気が湧いてくるのであつた。それで条件のよい作業に出されるようになり、またその作業を真面目にやるようになったことから、上官から条件の良い作業に出されるようになって、抑留さ

れてから人より上官の受けが良くなり、作業責任者を抑留された翌年の九月から製材工場、煉瓦工場、火力発電所と、昭和二十三年五月までやり、一般の戦友が帰還するまで勤め、警察官であつたことから、昭和二十三年十一月七日のソ連の革命記念日が終わると、思い出深い第六収容所を後に、さらに奥へとチェレンホーボの炭坑のある収容所に送られたのであつた。

この炭坑では憲兵と警察官だけの作業隊として編成され、収容所内では一般の兵とともに起居していた。我々憲兵、警察官には坑内に入るような作業はさせなかつた。穴掘り作業や砂取りなどの作業であつた。もうシベリアでは地下が凍結しており収容された当時のような穴掘り作業であつたが、凍土の上で板切れなどを集めて枯草に火を付けて燃やすと、地下が温まり凍結が解けて容易に穴を掘ることができた。最後にその灰を凍土に次の穴掘り場所にまいておくと翌朝は凍結が三十七センチもなくなり、その下も容易に掘れるようにな

ることを発見したのであった。これで一日のノルマは簡単に一五〇％上げることができた。今年の冬は越せないかもしれないという心配も解消されたのであった。

石の上にも三年とはよく言ったものである。四年目の冬も越してシベリアの陽春が来たころの五月ごろ、チェレンホーボの収容所をあとにシベリア鉄道でウラジオストツク方向に向かつて移動し、ハバロフスクのライチハという収容所に収容され、別に取調べもされずに昭和二十四年十一月末日ダモイの発表があり、ナホトカ港において帰還船栄豊丸七千トンに乗船して同十二月四日、舞鶴に上陸したのであった。

四年二カ月という長い抑留生活を祖国のためにしたのであった。舞鶴の上陸者名簿の氏名の頭に赤丸がついており、別に気にもとめていなかったが、帰還列車に乗車したところ自分の隣の座席に私服の警察官が乗車しており、明らかに監視していることがわかった。故郷へ帰り復職のため県庁

に出頭したところ、係官から「よいところがあつたらそちらへ行つてほしい」と言われ啞然とした。しかし自分はよいところはありませんかよろしく願ひしますと頭を下げてお願ひして復職させてもらったのである。もう年齢も三十三歳になろうとしており、足かけ七年の空白となっている。憲法も法律も改正されて新任からやり直しである。

昭和二十五年一月七日から現任教養が行われたが、教室に入ると暖かく心地が良く、長いシベリア抑留から祖国へ九死に一生を得て帰国し復職した安心感も手伝つてか、知らず知らずのうちに睡魔に襲われてつい居眠りしてしまうのであった。これは自分だけではなく、引揚警察官のすべてがそうであった。赤子が母親のふところに抱かれるように、寝ても起きても帰りたい、肉親にひと目会つてから死にたいと、そのみを思い続けて帰つて来たのである。長い獄中生活から解放された喜びは天にも昇つた思いであつたのである。

昭和二十五年一月から二月末日までの二カ月間現任教養を受けて、出征当時の部署に配置されたのであった。自分は国家地方警察で新潟地区警察署に配置され警察係を命ぜられ、主として庶務の仕事に付いたのであった。やはり舞鶴での引揚者名簿の頭に赤丸がつけられた関係から、試験的に見たのであった。

昭和二十七年三月末日で新潟地区警察署が廃止となり、同年四月一日付で国家地方警察白根地区警察署に勤務となって司法特務係を命ぜられ、科学捜査が行われて鑑識係が兼務となり、なかなか激務であった。指紋や現場写真の現像、焼付などで極端に目を使ったため視力が減退して、昭和三十一年四月一日付で駐在所勤務となった。

昭和三十四年十二月一日付で水原警察署へ転勤となり保安少年係を命ぜられ、昭和三十八年七月一日付で新潟中央警察署に転勤となって外勤係となり、各派出所の勤務となり、当番非番の二十四時間勤務が三回続き、なかなかの激務であった。

肺疾患となり夜勤が免除されてようやく治り、昭和五十年三月三十一日付で円満退職することができたのである。しかしシベリア抑留から帰ったのが数え年三十二歳の暮れであり、三十三歳の秋結婚したので長男がまだ大学の三年生であり、警察官を退職しても再就職しなければならず、引続き商社に入り二年九カ月、警備員の運営管理などの仕事を六年間もやり、十年近く働いたのであった。

警察官拝命して一年で軍隊へ二年、シベリア抑留四年二カ月、足かけ七年の空白は大きな犠牲であった。警察官に復職しても下積みで自分のせがれのような後輩に敬礼をしなければならず、屈辱的なことばかりであった。戦争さえなければ普通に勤務していても幹部に昇進することができるのに、戦争を恨みたくないのであった。

【執筆者の紹介】

出生地 新潟県中魚沼郡川治村大字城之古

(町村合併により)

新潟県十日町市城之古

本籍 新潟県新潟市上木戸

住所 右同

生年月日 大正七年一月二十四日

学歴 創立川治尋常高等小学校高等科卒業

職歴

高小卒後家事農業の手伝いなど

昭和十七年五月一日付 新潟県巡查拜命

同年九月一日付 新潟警察署へ配置

昭和十八年十月五日 会津若松東部二十四部

隊に召集入隊

同月二十日 満州東安省満州第一三八七部隊

に転属

昭和二十年八月九日 四平街・指導学校駐屯

八月十五日 四平街の郊外陽木林日本軍兵舎

に集結し、九月二十七日、四平街駅で満鉄の

貨車に乗車せしめられ、十月三十日、黒竜江

を渡りソ連領ブラゴエシチェンスクに入る。

同年十一月十一日 イルクーツク第六收容所

に入所、穴掘作業、測量の助手、製材工場の

作業隊長、煉瓦工場の作業隊長、火力発電

所、石炭作業の責任者などをやり、昭和二十

三年十一月下旬、チェレンホーボの炭坑收容

所に移送されて穴掘作業、建築工事の基礎作

業をやらせられる。この時も作業隊長をやっ

て、同二十四年六月中旬頃、ハバロフスクに

移送されて水道管布設作業の隊長をやつて、

昭和二十四年十二月四日、ナホトカから栄豊

丸七千トンに乗船して舞鶴へ上陸して帰郷し

た。昭和二十五年一月上旬、警察官に復職し

て、昭和五十年三月三十一日付をもって円満

退職した。退職後会社員として六十八歳まで

働いて、今日に至る。

(新潟県 長谷川 八郎)